

## ROSEリポジトリいばらき（茨城大学学術情報リポジトリ）

Title	兒島喜久雄先生のこと
Author(s)	三浦, 一郎
Citation	歴史研究(23): 38-41
Issue Date	1954-03
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10109/7973">http://hdl.handle.net/10109/7973</a>
Rights	

このリポジトリに収録されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作権者に帰属します。引用、転載、複製等される場合は、著作権法を遵守してください。

お問合せ先

茨城大学学術企画部学術情報課（図書館） 情報支援係  
<http://www.lib.ibaraki.ac.jp/toiawase/toiawase.html>

農村内に起まってくる新しい動きに懐疑主義の  
メンズを打ち合わせていまいのである。更に  
この準備は基本的には先生そして水戸田氏の  
考へておられる程に農村のブルジョアの勢力  
の発展が未熟であつたこと、少くともそれら  
が藩の政治的勢力として向うの力を結集させ  
る程に高まつていゝなかつたことに由来するの  
ではまいかと考へられるのである。

このように考へると幕末水戸藩の性格、イ  
デオロギーもかなりはつきりして来よう。先  
生は激波勢(所謂天狗党)のイデオロギーに  
ついて論及され、幕府軍と戦いながらも倒幕  
思想には至らず「公武合体的思想を脱脚して  
おらず」(五十六頁)と云われるけれども、  
彼等の行動そのものは確かに倒幕に繋がるもの  
として薩長と戦を結んだのであるから、当然  
彼等の考へるところのものばかり倒幕に  
つた筈である。たゞそれが事實として倒幕に  
り得なかつたのは水戸藩全体として倒幕陣営  
に参加し得なかつたからであり、ひいては豊  
村ブルジョア、農民に基礎をおいた激波が遂  
に藩政のヘゲモニーを握り得なかつたため

あつたと思ふのである。

そして維新政府が樹立されるに際して薩長  
の思想を固執した再野取系の態度というものは  
旧藩体制の封建的修正に限界を止め、村幕  
府関係というも、自藩が如何にその線におい  
て地位を高く保てるか、換言すれば、そのに  
めの行動の主導権をめぐつての対立であつた  
のではまいらうかと考へられる。つまり激波  
派の行き方は此自派は決して新しいものへの  
懐疑ではなかつたであつて、藩政史を眺めた家  
々の運動も市民革命と考へざるものにはな  
らぬと云ふのは必ずしもない。たゞ封建的権力再編  
成のための保守派に向つての反対斗争に敗れ  
たりとは云へ腐つた激波の甲にさゝやかなが  
ら真に下からの動きを認めることも出来な  
であらう。

以上、先生に対し失礼とは思ひ存から、お  
こがましくも私見を述べさせて頂いたが、云  
葉の上、或は理解不足のため弊札の所ありと  
すれは私の不慮の至すところであり、改めて  
お詫が申し上げねばならぬ。又水戸田氏の  
論議まで引用して皆を評した形になつたが、

水戸田氏に対しては後日個人的に或は本紙を  
借りて別に批判させて頂きたいと思つてゐる。

### 談話室

#### 児島茂久雄先生のこと

三浦 一郎

諸君はファン・レターというものを書いた  
経験を持つてゐるだろうか。私は敢かしいこ  
とだが、たつた一度だけ書いたことがある。  
その手紙は能優や、文士宛のものではなく、  
児島茂久雄先生宛のものだつた。しかし、さ  
すかに書いたばかりで、出しはしなかつた。

私は非常に倅せむことに、小學校から大学  
まで深山の良師に恵まれた。児島先生もその  
一人である。これらの先生の中にはたくなつ  
た方もあるから、いつかは思い出を書きたい  
と、常々思つてゐた。今日は児島先生の思い  
出を書きたい。

先生お話を最初につかひつたのは、私が  
高等学校の尋常科の三、四年、つまり、中学  
夜の三、四年に当る頃のことである。先生は  
白禪の同人座について話をされたが、私はそ  
のお話を聞いた夜に、先生にフアン・レター

を書いたわけなのである。諾込み教育の甚だ  
しいものと盛んに非難する者もいた、私の  
母校の酷しい教育方針の下での、学生生活の  
中で、白禪の人々の、仲ひのびと明るかつた  
唇唇の話をまいて、それに対するか慰せられ  
感激の心を、眠むられぬまゝに、手紙に托し  
て書いたのだが、私の学校の特殊な標子を、  
少し書かなければ、フアン・レターと書いた  
私の気持は判るまい。

たどと縁つ荷物を持つていても、校舎の中  
では一切帽子を穿るべからずとか、先生の右  
側を歩くなどが、日常生活の細かい点までべ  
からずつくめで、履物百禁酒煙も實際に守  
られていた高等学校(新制)に非ず。旧制高等  
学校也)。そんな高等学校生活を経験して  
いる時に、教室で真赤な表紙の帝國文学を授  
業時間中に盗み読みしている学生時代の発見

簿の読等を聴いたのだ。じいえは、先生の話  
が私にどのような響いたか、請高にも縁分か  
は想像出来なかつたしれない。先生の姿が、青  
唇の偶像のようにすり、私には思ひだったので  
る。

その頃から美術史を勉強したいという気持  
が、私の中に芽生えたのだが、これは今日ま  
で、どうも本当には向たないでしまった。  
私が大学に入った頃、児島先生は東北大か  
ら東大に転任された。先生の講義には非常に  
幸いなことに、「西洋史の単位とほすこと  
を得る」と註が付いていた。勿論これは私に  
は非常なまがで、先生の講義を聴講すること  
にした。ところが、仙台から荷物が着かへい  
という理由で、その後は荷物は着いたが、産  
理が着かないという理由で、雖が夏休前は、  
殆んど先生の講義は聞かされた。大変張り切つ  
て、先生の講義を待っていた私は、出鼻を挫  
かれたようで、多シかつかりした。

秋になって、いよいよ待望の講義が始つた。  
先生の講義のやり方は、ノートを読み上げら  
れる史学料の先生方には違つて、ノートなし

あるいは時に、洋書を二、三冊持つて来られ  
て、それをところ／＼めくつて話をされた。  
その上、先生の講義は、他の先生方に比べる  
と、始る時間は遅く、終る時間は早かつた。  
こんなことが、張りのり過ぎていた私を、ま  
た多シかつかりさせた。

当時西洋史の方では今井先生の「近世に於  
ける繁栄中心の移動」とか、村川先生の「ボ  
リスの成立」、東洋史の方では後、「日本上  
代史の一研究」の題で厚行本に於つて出版さ  
れた社内先生の講義等、後々まで評判になつ  
た名講義が、尸史の方では多かつた。従つて  
児島先生の講義には、内容の点でも、物足り  
なさびあつた。

すべてこうしたことは、私に、當て熱狂的  
な気持で仰いだ先生を、今度是非常に批判的  
に見させることになつた。するし、予言され  
るばかりで、殆んど著作を實現されたいこと  
も、現存の我が國の画家座にはかり、特に酷  
しく思われる先生の画評等、いろいろ氣に入  
らぬことが出て来た。そして、わざ／＼アラ  
をさびすたのかのようた、先生の書かれたも

のぞ、さびし讀んだりした。

ところが、そんなことをしている中に、笑は先生の勉力に、かえつて深く押われてしまつていた。講義中にされる脱線等録に興味深く、先生の字向の広さや深さ、感覺の鋭さ等が、端的に判り、先生の雅談の方を、特に氣をつけて筆記したりするようになった。先生の講義は、概をえれば努めて聴き、大學生時代も先生の講義には出た。

先生の脱線の中でも、特に心に残り難い話は、漱石と有藤阿貝氏の話である。「漱石が英國から帰つて来た日に、有藤阿貝氏は英國に成立つた。往く春、帰つた春が新獲歌にそれ／＼いたのは、時間的に余り隔つていなかつた。帰朝した漱石の一家は、有藤氏の留守宅で借りて住むことになつた。さて、この話を後世の伝記家達が知つた場合、漱石、阿貝の二人は、反人同心のこど致、新獲歌で相あつて、相語つたらう。又、留守宅を僦す、借りるという話は、二人の相談の上のことゝ考へるだらう。ところが、實際は二人は新獲で相あぬ、漱石が阿貝氏の留守宅に入ったのは偶

然であつた。丁史家は事物の相互關係とか、因果關係を単純に考へてはならぬ。話がつまざる時には、殊によく氣をつけねばならぬ

君達の一人が病欠届を出して、反人と関西旅行をするとする。やがてその人が債くまり、伝記が書かれることとなる。資料として、昨夜に出した欠席届と、旅行中に反人が、へ今何某と関西旅行をしていると誰かに出した給ハガキを見つかつたとする。伝記作者は手帳に出した届は公文書に頼るから、より信

じ得るとして、一何某は当時病氣中だつた」と伝記を書くだらう。ところが事實はそのこと存いのである。丁史家たらんと志す君等は、氣をつけねばならんよ」といふ話なのである。この話が大変おもしろかつたので、小宮豊隆の「夏目漱石」の、その頃のこゝを書いたところを調べてみると、先生のいわれたことと、少し違つていた。その後先生に、その話をすると、「確かに有藤先生から漢ほさう聞いたよ、小宮君ら当てにならんぜ」といわれた。又、この話をすると、「有藤先生に紹介してやるから、直接さいてもらはん」といわれ

た。まあそれほどの話でも存いから、いつか機会があつたらう、と思つている中に、有藤先生は亡くなつてしまつた。

最近ウォーリンガの「ゴチック美術形式論」を読んだか、丁史家は如何なる態度で過去に對し、さかしばう議論が先づ、長々と書かれていた。余り理論的で存い私には、こうしたウォーリンガの議論等より、この理論先生の脱線の方が、どれ位うるところ考へたかもしれない。

ルードウィヒの王座のウィーナスの誕生や香を吹く女、笛吹き女、クノツソスの王宮の壁面の宮女達を幻燈でスクリーンに寫して、指される先生の鞭の光を追つている中に、美に對する隔紙を縫合したこともある。

先生の我が國の現在國家に對する批評が酷しかつたことは上述べたが、それは彼等のデッサンの方の存いことだが、特に批判的に存つていゝのである。先生はさう批評されるだけに、すぐれたデッサン刀を持つていられたことは、先生の描かれたもの一たとえば「シオナルド研究」の中に入つていゝ、シオナ

ルドの漢字等一を見れば、すぐ誰にも判る。画家に存られても、一流の画家に存られたことだつたが、本誌の画家に存られたわけに、友人に見られる軽妙な味があつたことは、諸君が岩波新書の装釘に使われた尺神や、ランプの描線によく知っているところである。先生の著書される漢文字、同じようは味の美しいもので、私は消されて行くのを、いつも惜しいと思つて見ていた。

先生の酷しいのは画家に対してばかりではなく、翻訳等も先生にあつてこそみせて、「ああ、あれは誤訳だらけだ」とよくいわれた。「誰君は外遊して実物を見て来た筈なのに、よくあんなでたらめを書くのよ」等に、誰君の著作等も遺憾なく批評された。しかし、最も酷しくつたのは、おそろしく御自身に対してはなかつたろうか。

ある時先生の試験をうけようと思つて、教室に待つていると、助手が来て、「先生は先程まで居られたのが、どうしても見えなから、もう暫く待つてくれ」といつた。暫く経つて、「先生のよく行かれる喫茶器等まで

さかしたのが、見つからなから」とのこと。試験が延期になつたことがある。翌週来られた先生は、「実は忘れて帰つてしまつたのだ」と笑われた。このように大変存気なところもあつたが、御自身の学問に対しては、非常に酷しかつた。

先生の著書が予告ばかりで、殆んど實現しなかつたことは上述した及び、これは若い時からのごとで、「細屋のあさつて」にかけて海神時代には友人等に「梟島のあした」といわれてさうで、「あしたまごには、あしたまごには」と約束されては、原稿がなかく出来なかつたらしい。これは怠けて書かれなかつたのではなく、良心的なものを出したいと思われたためだつたもの、ようである。先生のライフ・ワークの「レオナルド研究」はドイツで出版される予定になつてはいたが、實現の寸前に原稿を破壊されたことは、よく人の知るところである。先生には要領よくということとは出来ず、気のすままでやらねば、気がすまなかつたらしく、学生時代には、試験問題について知つてゐることをまず、「一體に

いても書き切らぬ中に、時間がいつも来てしまつた」と、先生のある友人が書いている。先生の音屈らしい着迷が遂に現われなかつたのは、先生の自己に対する酷しさから、先生の気のすまされる時が遂になかつたわけなのである。

先生の人と存り、又、私が先生によつて得たものを伝えるには、これでは非常に不十分存のため、今は、これで筆を置こう。

卒業して行く諸君に送る言葉を書くやうにいわれて、私は全然見当違いな想い出を書いたやうである。しかし、諸君の多くは教職に就き、教員生活になられる筈である。私は良き師に遇まれた幸いを思い、諸君も良き師になられることを祈る。私は身を以ては良き師であること、諸君に示し得なかつたから、良き師の想い出を書いた。又教育というものが、全然ごまかしのさかぬ、全人格の、わるものであることも、併せて諸君に知つていただきたいであつたのである。